

二十六章

精神の完成

## 美德と悪徳

〔八九三〕 あらゆる美德の中、最も称讃に値するものは何ですか。

「美德はすべて素晴らしい。これらは皆、上方に向かう進歩の印であるから。悪の誘惑に自ら抵抗する、一つ一つの行為が美德である。しかし、美德の極致は、他者の幸福のための自己犠牲、これである。最高の徳とは、最も私心のない、最も幅の広い親切、そのような形をとる」

〔八九四〕 特にあれこれ悩む事もなく、自然な気持で善を為す人々がいます。また、善を為すのに自分の心と葛藤し、抵抗を乗り越えて初めてそれを為す人々がいます。これは前者と同じ価値がありますか。

「もはや利己心と闘う必要のない人は、既にある程度の進歩を遂げた人達である。それらの者は、過去において葛藤し、これに打ち勝っている。だから寛大な心になっており、もはや格別の努力を要しないのである。善を為すことは、全く自然な事と彼等は思う。彼等は既に親切の習慣を身につけているのである。彼等は葛藤の場の

段階を乗り越えた、手練の人と尊敬を受けるべき人士である」

「諸君が未だずっと完全から遠い処にいますので、彼等を見て驚くのである。彼等の行為は一般の人々の行為から見ると、甚だ対照的である、その珍らしさから諸君はこれを称讃する。だが、諸君の世界で異例な事も、別の進歩した世界では常習であるということ、これを承知おき願いたい。其処では、いつでもどこでも、善は自然なものなのである。其処には善良な靈しか住んでおらず、ちよつとした悪意さえ、異常な極悪と考えられてしまうのである。これらの世界が幸福なのは、このように美德が一般の習いとなつていゝること、そこにある。人類が変容を遂げ、愛の法を正しく理解して実践するようになれば、諸君の地上世界も同じようになる」

〔八九五〕 誰が見ても分かる悪徳や悪行、これ以外に、不完全性の最大の特徴といえは  
何ですか。

「利己心である。見せかけの徳は、金メッキした銅のようなものだ。それは試金石にあつたらひとたまりもない。いま一人の人がいて、世界一般の目からは有徳の士と

されるかもしれない。彼はある程度の進歩を遂げてはいる。しかし、その資質は試練に合えば耐えられぬかもしれない、少々彼の自己愛が障害にぶつかると、本性が暴露されてしまうのである。地上世界では、絶対の無私を極めてまれないことであつて、諸君は驚異的な事として吃驚するのである」

「物質に対する執着心、これも未熟であることの印である。何となれば、人間が現世の物事に気を奪われれば奪われるほど、自分の道を見失つていくということだから。この逆の場合は、来世の方まで目がはつきり広く見えているという事である」

〔八九六〕 氣前はいいが、ものを見る目がなく、金銭の使い方もどんぶり勘定で、そのため、何の役に立つこともなしに浪費してしまう人がいます。こんな人の行為に何か価値がありますか。

「利己心がないという点で評価される。だが、善行の点では評価できない。非利己は美德であるとしても、無思慮な浪費は、控え目に言つても判断力の欠如である。財産は、これをちゃんと管理する人には与えられても、これを浪費する者には、もう

与えられることはない。財産は、収支報告を要する預金なのである。人は、もしかしたら出来たのに、実行しなかった善行すべてを報告せねばならぬ。人は無用に浪費した金で、もしかしたら泣かずにすんだ人達の、すべての流した涙に償いをせねばならぬ」

〔八九七〕 此の世で報いを受けるつもりはなく、あの世で良い報いを受けたくて、善行に励む者は、ほめた事ではないのですか。あの世での地位は、そのために良くなりましょうか。そういう計算は、本人の進歩のために、よい事でしょうか。

「人は愛によつて善事を為すべきもの——即ち、無私によつて」

——しかし、私共が現在の苦悩の状況から脱け出るために、進歩を望むのは当然の事です。霊達も、私共がこの目的を達成するため、正しい事をするよう、教えてくれています。ですから、いま地上の現状よりも、私共が良くなるうとする事が、間違いででしょうか。

「間違いではない。しかしながら、自分の事は何も考えず、神に喜んで頂くため、苦

しむ隣人を助けるために、唯ただ進んで善を為す者は、既に高い進歩の段階に達している者、幸福の頂上の程近くに在る者。彼等を次の者に比べるとは、つまり、心情の自然から愛のためにのみ心せかれて善を行うのではなしに、もっと利己的で、計算をして善を行う者、こういう者と比較すれば、な」

——隣人に善を行う事と、私共が自己の欠点は正のために払う配慮と、この間に線は引かれませんか。私達があのだ世で得になるからという考えで善をしても、殆んど価値がないという事は分かります。しかし、自分を高級霊の方に近付けたい、自分を靈界の高い地位へと高めたい、そう思つて、自己を改善し、悪い感情を克服し、良からぬ性質はすべて正していくことは、やはり低俗なことですか。

「いや、いや。〔善を為す〕とは、彼等が意味したのは、愛が深いこと、これであつた。計算する者、自分の行う愛の行為が、此の世であの世で幾らになるか勘定する者は、利己的に事を行っているのである。だが、自己を神に近付けようと望む者、それがすべて努力の目的であつて、自己改善に励むことの中には、いかなる利己もない」

〔八九八〕 地上の命は、低級な状況下での、ほんの一時の逗留にすぎません、それ故、

来生こそ主として心に留めるべき生活です。従って、現世の事、現世の必要、それだけしか取り扱わぬ科学知識を習得して、何の役に立ちますか。

「絶対に有用である。と言うのは、この知識によって、諸君は同胞に利益をもたらせるからである。それだけではない、諸君の霊が、もし知的に十分に進歩すれば、他界に入つて急速に進歩できる、地上で何年もかかった事が一時間で習得できる。どんな知識といえども、無役ではない。すべての知識が諸君の進歩に、大なり小なり寄与する。と申すのは、完成した霊はすべての事を知らねばならぬ。進歩はあらゆる方面でなされねばならぬ、すべての得た知が本人の進歩を進め、役立つのである」

〔八九九〕 いま二人の人物がいまして、共に金持です。二人とも、その富を自分の満足のためにだけ使っています。一人は富裕の生まれで、不足を知りません。もう一人は汗水流してその富を入手しました。どちらの方の咎が大きいですか。

「不足をすることが何であるかを知っている方が、咎が大きい。と申すのは、彼にはその痛みが分かるからである」

〔九〇〇〕 他者のために何も良いことをせず、ただ溜める一方の人が、それは子孫に残すためだとすれば、言い訳がたちますか。

「そのような弁解は、こじつけにすぎない」

〔九〇一〕 二人の強欲な人間がいます。一人は生活に必要な物まで切りつめ、蓄財に囲まれ質素に死にました。一人は、他人にはけちですが、自分のためには出費を惜しみません。また、他者のための奉仕とか、高貴な目的のためとかには、爪の先ほどの犠牲も出し惜しみるくせに、自分の趣味や享樂のためとなると、まるで出費にしまりがないのです。この人物は、人から奉仕を頼まれば、いつも金がないと言うくせに、こと自分の楽しみに湯水のように金が出るのです。この二人の中、どちらの方が罪深いでしょう、また、他界に入ればどちらの方が状況が悪いでしょう。「自分の享樂のために金を使う方が罪深い。この人間は欲が深いというより、利己主義なのである。もう一人の方は、既に罰の一部を受けている」

〔九〇二〕 善事を為す手段として、富を求めることはいけな事ですか。



「この願望は、純粹であれば褒めてもよい。だが、いつも全く私心がないだろうか、何か自分の隠れた気持がひそんでいないだろうか。良いことをしてあげたいという第一の相手が、自分自身であることが、余りに多くはないだろうか」

〔九〇三〕 他人の欠点を詮索することは、間違ったことですか。

「ただ批判したり、すっぱ抜いたりするためだけなら、それは大変悪い。つまり、それは愛を欠いた行為だから。自分にある欠点を取り除いて、自分のために役立てようという考えをするのなら、役に立つ場合もある。しかし、他人の欠点に寛容であることは、愛の要素の一つであることを、忘れてはいけない。他人の欠陥を非難する前に、先ず、他人が自分の同じような欠陥を非難していないか、これを考えるべきである。他者の欠点を詮索して役に立つ唯一つの道は、反面教師、これから学ぶことである。彼は欲が深い？ そうしたら寛大になりなさい。彼は高慢？ 諸君は謙遜で慎み深くなりなさい。彼は無情？ そうしたら親切でありなさい。彼は卑劣漢でけちんぼ？ 諸君は自分の行為すべてに崇高でありなさい。要するに、イエス

の次の言葉が、諸君のことを言っているのだと言われぬよう、行動しなさい、（他人の目の塵は見えるのに、自分の目の中のうつぶりを見ない」と

〔九〇四〕 社会の傷の部分、はつきりさせる目的で、あれこれ詮議だてする事はいけない事ですか。

「それは何のためにするのか、その動機いかによる。スキャンダルを生むだけが目的なら、為にはならぬ。世を害する図を描いてみせて、自分一個の満足を得るものである。本人の心にはその社会の悪が分かっているながら、その悪を描き出して楽しむ傍観者は、その罰を受ける者となろう」

——この場合、その作者が誠実であること、その意図は純粹であること、それはどうやって判断できますか。

「それは必ずしも判断をする必要はない。もし作者が良いものを書けば、それによって利益を得る。悪ければ、それは本人の良心の問題である。どうしても本人が自分の誠意を証明したければ、彼自身が優れた手本であるように振舞わねばならない」

〔九〇五〕 非常に素晴らしい道徳的教えが沢山書かれている書物があり、人類の進歩に役立っているのですが、作者達本人の道徳性には、大してプラスにはなっていないのです。作者達が著作を通じて行った善は、本人の靈に報いられることになるのですか。

「道徳原理は、これを実践しなければ、播かない種子のようなものである。種子はこれに実を結ばせ、食糧としなければ、何にもならない。左様な人物は、自分の言うことを人に理解させる知性を持っているのだから、なお更罪が重い。人にすすめる美徳を自分は実践しないことで、彼等は本当は手に出来た収穫を失ったのであった」

〔九〇六〕 善を為す人が、自分の行為が善であることを、また自分にとって良い事であることを意識するのは、良くない事ですか。

「人は自分の行う悪を意識する限り、また自分の行う善をも意識する。人は自分が善悪いずれを行ったかを知ることが出来るのは、この本人の良心の声に依るのである。人は自分のすべての行為を、神の秤、特に正義と愛と奉仕の秤で計量して初め

て、自分が善であるか悪であるかを決定できる。また、善しとできるか否かが決定できる。それ故に、彼が自分の悪に打ち克つた事実を知り、これを喜ぶことは、もしこの認識を無駄にしなければ、それは悪かろう筈がない。何となれば、もし無駄にでもすれば、自分が克服したと同様な悪の道を歩くことになろうから」

## 激情

〔九〇七〕 私達の激情は自然に出て来るものですから、激情はその本性が悪なのでしようか。

「いや、悪いのは過度の激情である。何故なら、過度は意志の乱用であるから。しかし、感情はすべてその根源において、人間のため、善のために与えられている。感情あればこそ、人間は拍車をかけられ、偉大な仕事をやり遂げようなどともくろむ。害となるのは、感情の乱用、これのみである」

〔九〇八〕 感情が良いものになるか悪いものになるか、どうやってその限界を定めれば

いいですか。

「感情は馬のようなもので、管理下におけば役に立つが、思いのままにさせておけば危険である。感情は本人が支配を止めた瞬間、有害となる。また、本人ないし他者に害が及ぶ瞬間から、悪いものとなる」

〔注解〕 感情は人間の力を十倍にも増大させる梃子てこであって、人間が神意を実現するに当たり助力となるものである。但し、これを支配せず、逆に支配されていると、あらゆる面で過度におち入り易い。また、上手に扱えば有用な力が、逆に人間を襲つて、押しつぶしてしまう。

激情はすべてその源は、自然な感情や自然の欲求にある。それ故、これは神によって定められた生命の在り方の一つであり、それ自体が悪ではない。激情とは、感情や欲求の誇張されたものである。

この誇張とは、動機いかんで過度な働きとなるので、力そのものではない。悪となるのはこの行き過ぎた働きである。これがすべての悪い結果につながる。

激情はすべて、人間を動物の性質に近付け、人間を霊的性質から遠ざける。動物

性の上に超然とする感情は、人間に動物性以上の靈性が存在する証拠であり、これによつて、人間は完全に向かつて進む。

〔九〇九〕 人間は努力によつて、必ず、自分の悪い性向を克服できるものですか。

「左様、ほんのちよつとの努力、それを時々やれば、それで十分だ。欠けているのは意志である。ああ！ 諸君等のうち何人、本当に真面目に、自己改善の努力をしているだろうか」

〔九一〇〕 激情を克服しようとする場合、靈からの援助が十分うけられますか。

「神や守護靈に、援助を請う真摯な祈りを捧げれば、必ず助けが得られる。それがあの方々の使命なのだから」

〔九一一〕 場合によつては、激情が激しすぎて、意志の力ではとても押さえきれない、という事はありませんか。

「へよし、決心した」と言いながら、その決意は口先だけ、それが出来なくても残念がりもしない、そういう者達が余りにも多すぎる。人間が激情を克服できないのは、

靈が後向きになっていて、本人は激情のままになって楽しんでいて、こういうことである。感情のコントロールが出来る人は、靈性をよく理解しているのである。激情の克服は、自分の靈が物質に打ち克つこと、こう、その者は承知している」

〔九三〕 物質支配と闘う最も有効な方法は何ですか。

「自制の發揮、これである」

### 利己主義

〔九三〕 数ある悪徳の中、それらの根源をなす悪徳は何ですか。

「利己主義、これは繰返し諸君等に述べたとおりである。諸悪が生じるのは、この利己主義からなのである。悪徳をよく調べてみられよ、さすれば、その根源に利己主義があることに納得がいこう。決意をしたら悪と闘ってみなされ。その悪の根源に至り、悪を生じさせている利己主義を滅ぼさぬ限り、悪の根絶には成功せぬものである。すべての努力をこの目的に向けなさい。利己主義こそ、社会腐敗の根源であ

るのだから。自分の日常生活においても、何か心の進歩を求めらるなら、自分の心から利己的感情を取り除かねばならない。利己心こそ、正義・愛・奉仕とは相いれぬもの。これがすべての良いものを、台なしにしてしまうのである」

〔九一四〕 利己主義の根は、個人的利益という感情にあります。従って、人間の心からこれを根絶することは、甚だ困難な事、このように思われます。それは出来ることなのですか。

「人間の目が靈的なものに開かれていけば、人間は物質にとらわれなくなる。こうして、物質の奴隷から解放されていくにつれ、利己主義をかきたてるような制度は改善されていく。教育はこのようなところを目指すべきである」

〔九一五〕 利己主義は人間にとって生来のものです。ですから、地上を美德が完全支配するには、これが障害となるではありませんか。

「確かに、利己主義は諸君の最大の悪である。しかし、利己主義は地上に生まれて来ている靈がもっている未発達性にあるのであって、何度も再生して浄化を重ね、利



己主義を払い落としている霊もいるように、人類に属するものではない。地上には、利己心を脱して、奉仕に献身している人が居ないというのかね。そういう人士は、諸君が考える以上に居る。だが、彼等は殆んど人に知られていない。美德というものは、人前に派手に身をひけらかすことを好まぬから。もしも諸君の中にそのような一人が居たら、どうして十人いないだろうか？ それが十人いたら、どうして千人、等々、いないだろうかね？」

〔九一六〕 利己主義は、減るところか、文明と共に増えていきます。その文明が利己主義を強化助長しているように思えます。どうすれば、このような結果が失くせますか。「悪は太れば、いよいよ忌わしく見えるもの。利己主義も目に余る害を及ぼすに至り、諸君はその根絶の必要を覚える。人間が利己主義を脱却すれば、兄弟のようになり、他を傷つけるということはなく、気心も一つになって相互に助け合う。強者は弱者の圧迫者ではなくなり、支持者となる。誰一人生活の資に事欠く者はいなくなる、正義の法、万人が従うのであるから。いま霊達がその新時代の到来を目指して従事しているのは、実にこの正義が支配する時代の到来のためである」

〔九一七〕 どんな方法をとれば、利己主義は打破されますか。

「人間の不完全性の中で、最も根絶の難しいのが利己主義である。と申すのは、利己主義は物質の力と結び付いており、人間は未だ初等段階にあつて、その力から自由ではないということ。それに、人間の法律、社会機構、教育などすべてが、この物質の力を維持する傾向にあるということである。人間の精神生活が物質生活より優位になつていくにつれて、利己主義は漸次弱まつていこう。それは心靈主義によつて、寓話の覆いはずされ、人間の死後生存の事実が明らかにされる、その知識を通じて進められる。心靈主義が正しく理解されるようになり、人類の信仰も習慣もこれと一つになる時、慣習・風習・社会関係の一切が変化していこう。利己主義は自分個人の重視、そこに立脚している。心靈主義はこれに反して、正しく理解されれば、個人という感情が消えた、いわば無限の觀照とでも言うか、大變高められた觀点、そこから一切を見る目を人に与えるのである。自尊の感情を打倒する点で、人間の眞性を示してくれることで、心靈主義は必ず、利己主義と闘うものである」

「人間は他人の利己主義に触れる経験をすると、自分が利己的となることがよくある。

相手の利己主義から自分を守ろうという欲求を覚えるのである。他人が自分のことを考えて、こちらの事は考えてくれないのを見ると、その本人も他人のことより、自分の事を考えるようになるのである。しかし、奉仕と友愛の原理を、社会制度の基礎に、また国際間及び人間間の法的関係の基礎に入れてみるがよい。そうすれば、人々は自分個人の利益という事をさほど考えなくなるだろう。何故かという、自分の利益が他者によって配慮されていることが分かるからである。即ち、人は精神感化の実例や実際の体験を持つわけである。現代の利己主義が氾濫する中では、感謝も余りしてくれない他者のために、自己の利益を犠牲にする事は、余程の徳性がなければ出来ることではない。しかし、天国が開かれるのは、結局、この徳性の所有者に對してである。また、この者には選ばれた者の幸福も保証されるのである。これに對し、審判の日に、自分の事だけを考へてきた者は除外され、孤独の苦しみの中にとり残されるであろう」(中巻(七八五)参照)

フェネロン

〔注解〕 人類の進歩を促進するために、称賛に値する努力が払われている。他のどの時代よりも、寛仁な心が大切にされ支持されているが、なお利己主義が社会の病氣

をなして、悩みの種である。人々にはこの社会の疾病が影響を及ぼすのであって、人々は多少ともその犠牲者である。よって、我々に伝染病と同じように、これと戦わねばならない。そのために、我々は内科医と同じように、疾病の原因にまでさかのぼることから始めねばならない。我々は、利己主義を温存させ発展させるすべての原因と作用を、家族関係、国際関係、あらゆる社会組織に至るまで、探し出さねばならない。病気の原因が分かれば、治療法はおのずから分かつてくる。病気の原因は多いから、治療は遅々たるものだろうが、しかしそれは不可能ではない。それは悪の根元にまで達すること、即ち教育の普及によって、効果をあげ得よう。それは単に知的進歩のための教育でなく、道徳的な向上をはかる教育によってである。

人間は幸福になりたいと願っている。生来人間に備っているこの願望によって、人間は促され刺激を受けて、地上生活の環境を改善しようと努力する。また、自分を苦しめる悪の原因を探し出して取り除こうとする。利己主義は悪の原因の一つであること、利己主義は苦の因である高慢、野望、貪欲、嫉妬、憎悪などを生み出す

こと、すべての社会関係を混乱させ、意見を衝突させ、信頼関係をこわし、友人を敵に変え、隣人に対してはいつも警戒心を抱かせること、以上の事がはつきり理解できれば、人間はこの悪徳が、自分の幸運だけでなく、安全とも矛盾するという事、これに気付くに至ろう。人間がこの事で悩めば悩む程、痛切にこれと闘うことの必要を感じるだろう。それは、病気や危険な動物や他の災厄の原因と闘うのに似ている。何となれば、彼は自分自身の利益のために、そうせざるを得ないのだから。

利己主義は、愛がすべての美德の源であるように、諸悪の源である。利己主義を滅ぼし、愛を発展させることは、現世においても死後においても、自分自身の幸福を確保したいと願う、すべての人々の目的であるべきである。

### 高潔な人の特色

〔九一八〕 霊的に高い進歩を遂げている人は、どんな特徴がありますか。

「肉体をまもっている人間の霊の高さは、地上生活での行為のすべてが、神法と一致

していること、及び、靈的生命をよく理解していること、これがその証拠である」〔注解〕 真に高潔な人は、正義と愛と奉仕の法を、無上の純粹さで実践する人である。彼は常に自分の行為に関して良心に問う、悪い事はしなかつたか、力一杯よい事をしたか、自分に対して不満を抱く者がいないか、自分が人からして貰いたいように人にもしてあげたかと。すべての人に対して寛容と愛の心に満ちており、報いを求めることなく善のためのみ善を行い、正義のため自分の利益を犠牲にする。人種や宗教の如何にとらわれず、すべての人を兄弟と思ひ、寛容で優しくすべてに愛情をもっている。

もし、神がこの者に力と富を与えられたら、彼はこれを全体の利益のために、彼に委された預りものとみなす。彼はこれを自慢の種とはしない。何故なら、彼は、これを彼に与えた神は、彼からそれを取りあげることにも出来る事を知っているから。

もし、社会機構のせいで、彼に部下ができたなら、神の目からは同輩なので、彼は愛と寛容をもって受け入れる。権力は彼等を精神的に高めるために使い、威張って

相手をへこますためではない。彼は他人の弱点に対して寛大である、それは彼も他人からの寛大さが必要な人間である事を知っているから。また、キリストの次の言葉を覚えていいるから、〈罪のない者が、最初の石を投げなさい〉

彼に復讐心はない、だが、恩恵だけは覚えていいる。イエスの範に習い、彼はすべての罪を許す。それは、自分が他者を許した分だけ、自分も許される事を、知っているから。

彼は他者の権利を尊重する、自然法に基づいたものとして。彼は、自分の場合も、権利が尊重されるのを望んでいいるのである。

### 自我——認識

〔九一九〕 毎日の生活で、自己の精神的向上をすすめ、悪の誘惑にびくともせぬ、そのための最も効果的な方法は何ですか。

「古代のある賢人が、既に諸君に告げている〈汝自身を知れ〉と」

——私共はこの格言の知恵を十分に承認しています。しかし、この自己認識は、最も習得することの困難なものです。どうやったらこれが習得できますか。

「地上に在った時、私がやったのと同じ事をなされよ。一日の終りには、私は自分の良心に問いかけ、その日のすべての自分の行為をかえりみた。何か義務を怠らなかつたか、誰か自分に不満のある理由を持つ者はいないかと。このようにして、私は自己認識を行い、自分の改善する必要があるものは何か、これを確かめるのに成功した。毎晩こうして、その日のすべての行為を思い、良い事をしたのか悪い事をしたのか自問し、神や守護靈に導いて下さるように祈る者は、自己改善のための大きな力を得ることが出来る。と申すのは、神が彼を助け給うからである。これらの質問を自分にしてみるがよい。自分がした事を自分で調べなさい、どんなつもりでそれをしたのか、とくと自分に尋ねなさい。何かを人のせいになかつたか、公言して恥じるような事をしなかつたか。また、次のように自分に問いかけるがよい、  
へもし、いまこの瞬間、神が私を来世に呼び戻したいと望まれたら、何も隠しだて出来ない霊の世界に戻るにあたって、私は誰かの目を恐れねばならないことはない



「だるうか」と。自分のした事を、先ず神に対して、次に隣人に対して、最後に自身に対して、どうであるかを審査してみよ。これらの質問の答えが、自分の良心に休息を与えるか、あるいは、何か精神的な痛みを示すか、いずれかであろう。この痛みが貴方の治さねばならないものである」

「それ故に、自己認識は自己改善の鍵である。しかし、諸君は尋ねよう（どのよう）に、自分を判断したらよいのか。人間は自己愛の幻想におちいり、自分の欠陥など目に入らなくなり、自分を良い子にしてしまう。守銭奴は、自分は節約して先見の明を發揮しているだけだと思い、高慢な人間は、うぬぼれを權威だと考える」と。これは事実である。だが、諸君は自分を欺くことの出来ない、自己確認の手段を持っている。もし、諸君が自分の行為の何かに疑問を持ったら、自分に聞きなさい。もし他人がそれと同じ事を自分にしたら、自分はどう思うだろうか。もし、それはその相手が悪いと思えたら、自分の場合も同じ事なのである。神は二つの秤を持ってはおられないのである。また、相手の立場に立って物を考えるよう、努力をしなさい。決して相手の者の意見を見過ぎしてはならぬ。神は諸君の傍に敵（相手）とい

う鏡を、しばしばお置きになる。友人の言葉より、もつとはつきり諸君に警告して呉れるものとして。次に、心に堅く自己改善の決意をしている者は、庭の雑草を引き抜くように、自分の悪の性向を根絶するため、良心に審問しなさい。每晚、その日の自分の道徳上の収支を、清算せよ、商人が収入と損失を計算する具合に。本人は、収入の方が損失よりも、得なことに氣付こう。一日の行為の後を辿ってみて、今日の収支決算はうまくいっている、こう言える者は安眠できよう、やがて死後の世界で目覚める、その瞬間を何の恐れもなく待つことが出来よう」

「我等に向ける諸君の質問は、はっきり正確に、これをしなさい。決してその増えることをためらってはならぬ。諸君等はほんの数分間を、永遠につづく幸福を手にするために、捧げればよろしい。諸君等は毎日、老後の休息を手に入れるため、働いてはいないのかね。この休息こそ諸君等の目指す対象、疲れても苦しくてもじつと我慢をする目的、そうではないか。だが、どんなに違いがあるだろうか、身体が弱ってしまつてからの数日の休息と、徳を積んだ者を待ち受ける終りのない休息と、この間に。この後者こそ、二、三の努力を払うに値いするものではなからうか。

私にも分かつておる、多くの者達はかように言おう、〈現世は確實にある、死んでから先は分らない〉と。だが、これは全くの間違いである。我々はこの間違いを諸君の心から取り除こうと、かように仕事をしておる。つまりは、諸君の心に一点の疑問も残さぬよう、左様な方法で、諸君に諸君の未来の生活をお見せしておる。かような訳で、我等は諸君の感官に訴えながら、諸君の関心を引き付ける、左様な現象を生起させる、そういう方法で仕事を始めた。そうして今、かように諸君達に、精神的な教示を提供しておる。諸君等が、今度は代って、これを世に広める役割となる。我等が『霊の書』を口述してきたのは、この目的のためである」

聖アウグスティヌス